

創部五五周年を祝う

会長 近藤 節夫

何と輝かしいことであろうか！
何と誇らしいことであろうか！

わが湘南高校ラグビー部は歴史的な創部五五周年を迎えることができた。戦後の荒廃した世情に、しかも華々しい甲子園の全国高校野球大会初出場初優勝という、赫々たる戦果の直後に、秘かに先人たちはラグビー部を立ち上げたのである。

時は過ぎ、この間楕円形のボールを追って多くの仲間がグラウンドを駆け巡った。その数、実に七百名になんとする。今や多くの仲間が母校のグラウンドから、ラグーマン・スピリットを胸に、広く世界へ雄飛している。

幸い近年仲間たちのキズナは著しく強固になってきた。これは仲間たちのラグビーに対する情熱回帰と母校愛に新たに火が灯ったせいであろう。言うまでもなく、SRCは自然発生的にスタートしたのではない。縁の下の力として、創部に関わった岩田明前会長ら有志が、初心に立ち還りラグビーへの愛情と母校愛をこのまま放置することを潔しとせず、同じ釜の飯を食った同輩に呼びかけてひとつの同窓組織として発足させたものである。この間

SRC自体の努力はもちろんであるが、時の学校側、現役部員、保護者等々のご理解とご協力があったことを忘れてはならない。爾来その歴史と伝統は延々半世紀に及ぶ。

SRCは、当初ひとつの大きな目標を掲げた。曰く「ラグビーをきずなとして、第二の兄弟たることを目的とする」。素晴らしいモットーである。現代では些か大時代的な表現に見えるが、巧くラグビーの本質を突いた言葉であると思う。ラグビーをプレイすることは、友だち作りであり、思い出作りである。このモットーを広く浸透させ、後輩たちにも意味するところを伝えていきたいと考えている。

いまSRCと高校ラグビー部は、好ましい自然な関係にある。活動のひとつの基本である、支援活動が滞りなく継続されていることもさることながら、その過程で役員、学年幹事、コーチらから多くの献身的な協力をいただき、活動を続けられることが力となっている。多くの会員各位からも物心両面で沢山のご支援をいただき感謝に堪えない。

これからの方向は、選出された各学年幹事を縦の組織として、その学年幹事から枝葉的に同学年会員へ確実にコンタクトするネットワーク体制をさらに固めて、SRCの基盤と全体のフレームを磐石にしたいと願っている。その中でも特に、若い会員に積極的に活動してもらえれば、実技指導の面でOBと現役の連携は一層強固なものとなる。

ラグビーは素晴らしい！プレイも楽しいが、その余韻となる

臨場感を伴う思い出や、仲間意識はさらに至福の喜びである。ラグビーを仲立ちとして、その至福に与ったわれわれは、ラグビーの本当の良さや、ラグビーに関わったことよって得た喜びを、もっと多くの後輩たちに伝えることよって、彼らが三年間ラグビー部活動に没頭するようになってほしいと思っている。

創部五五周年に際し、OBと現役がともに手を携え、湘南高校ラグビー部の新たな飛躍へ向けチャレンジしようではないか。

Ever onward!!

湘南ラグビークラブ夜明け前

三一回 和田 正温

創部五十五周年心よりお祝い申し上げます。

手元にかなり古い何れも懐かしい二種類の書き物がある。

その一つは、湘南高校運動部連合編集による昭和三十一年三月に発行された表題「湘南SPORTS 1956 1号」という謄写版印刷による機関誌、もう一つは、万年筆書きによる小生宛の四通の葉書、内容は湘南高校火災によるラグビー部用具の焼失のため、湘南高校ラグビー部及び同期（三十一回生）の葉山水樹君からの寄付の依頼状（昭和三十三年（一九五八年）四月付）。寄付に対するラグビー部からの礼状、更に新ジャージ新調による不足金に対する当時の平岩キャプテン（三十五回生）からの寄付の依頼状である。

一方、「湘南スポーツ」は文字通り、ラグビー部をはじめ当時のクラブ十六部の紹介、昭和三十年度の各部試合記録が掲載されている。

我がラグビー部の欄は、現SRC近藤会長の執筆による部及びラグビーそのものの紹介、昭和二十九年十月二十四日の対Y校戦以下、対法制二高、対平塚農高、対平塚高、対小田原城東高、合計五試合の結果が記録されている。

当時のラグビー部は出ると負けると揶揄されていたこともあり、対平塚農高12対6の勝ち、法政二高に5対0の惜敗は選手各人にとっては一生忘れることが出来ない思い出となっているはずである。その時のメンバーを見ると、十五名の選手のうち九名は、湘南高校入学時の十七組の者達である。このことは、同時のラグビー部顧問、十七組の体育の授業の担当でもあった仲宗根仁正先生（体操が専門、日体大卒）の部員確保に並々ならぬご努力をされたことを物語っている。

ある時期ラグビー部は人数不足なのだからグラウンドホッケー部に鞍替えすべきであるということが学校内部（一部の先生方から）持ち上がったが、これを阻止したのも仲宗根先生であったとのことである。

全く考えられない学校の火災による被害。焼失用具回復を中心にラグビー部建て直しを余儀なくされ、当時の現役諸君はOBに對しカンパの働きかけが必要になり、これが今手元にある葉書となった。この運動の成果は次の段階へ発展した。

何とか公式戦に出場するメンバーはギリギリ確保できていたものの、満足できる練習を行うためには絶対的に人員不足、ゲーム経験を豊富にするための練習試合の相手となってくれる適当な学校が見当たらない。

これに對応すべく当時の現役三十五回平岩君、三十六回井出川君等からOBを召集して欲しいという話が持ち上がり、OB有志の召集状を謄写版印刷するため藤澤氏片瀬の我が家に集まった。

昭和三十四（一九五九）年四月明仁皇太子（今上天皇）・美智子妃殿下結婚祝賀パレードのテレビ放映があった日であった。

当初OBの後輩援助は土日に湘南高校グラウンドでゲーム形式主体に、三十二回菊地・滝沢両君、三十四回巽君等の献身的な参加を得て、それなりに成果は上がった。OBチームが日本精工とゲームをしたこともあった。オレンジ色（湘南電車の色がヒント）の当時のジャージが小生のタンスの中に大事に保管されている。

当時はOB有志ということもあり、組織的なものではなかったが、これが母体となり、昭和三十九年四月、湘南高校ラグビークラブ・会則が制定・施行することとなった。我々有志が母校のグラウンドに再び足を運び始めていた三十四年から五年を経過した。

この間、岩田初代会長の主導のもと、何度となく会議が開催され、会の名称も色々候補が挙がり、その中に烏森クラブというものもあった。永久会費制度は総額一千万円を目標とし、これを基金に当時の高金利を利用、金融運用して、その収益で会の運営を捻出しようという胸算用であったが、残念ながら目標額を達成できず、高金利時代は去り、夢物語となっている。

それにしても我々の時代とはラグビーもかなり変わった。ルール面では、トライが3点から5点に、ペナルティーキックの扱い、ダイレクトキック等。プロップ、フランカー等のポジション名もなかった。

部活の面では女子マネージャーの誕生に加え、保護者の積極的参加、公式戦は勿論のこと、練習試合のみならず夏合宿に祖父母

の応援、親父お袋が応援に来てくれた記憶は小生には全くない。本当に羨ましい限りである。

創部五十五周年、湘南ラグビー部は健在である。それぞれの自体、それぞれの苦勞を乗り越えて輝かしい伝統を築き上げてきた。今後ともこの伝統を守り、創部百周年を盛大に迎えらるることを祈念して止まない。

I R B 公認コーチ見習い中

三六回 井出川 洋

I R B (International Rugby Board) 公認レベル I コーチになりました？

二〇〇三年一〇月、シドニーでラグビーワールドカップ準決勝の二試合を観戦することが出来ました。

ゲームの一〇日前、オーストラリアの友人から「チケットが手に入った。来る？」「喜んで！」ということと急遽娘と一緒にシドニーに行きました。

シドニーのスタジアムはシドニーオリンピックのメイン会場八万人収容の大きなスタジアムですが、日本の国立と違い前一〇列ぐらいは、選手と同じ目線で観戦できるのでとても迫力があります。

オールブラックス対ワラビス戦、ご承知のようにワラビスの術中に嵌ったオールブラックスはハーフタイム後も作戦変更できず、成すところなく敗れました（このゲーム以外オールブラックスが勝っているのに）。

五年ほど前、オーストラリアで王、長島級人気のキャンペーン（David Campaign）と子供のラグビー教室を通じて繋がりが出来、それ以来、毎年来日時、彼のラグビー教室を手伝い、空き時間に温

泉に行ったりしています。

二〇〇四年六月、オーストラリアラグビー協会主催（日本ラグビーフットボール協会承認）I R B 公認のコーチ認定レベル一講座が関東学院大グラウンドを会場に初めて日本で開催されました。この講座、参加資格等で難しいことを問わなかったことから一二〇名（女性四名）が自費で参加し、二日間、講義と実技を受講しました。

還暦をとうに過ぎているのに今更の感がありますが（六〇歳以上が三名いました）、付き合いで参加しました。オーストラリアのトップコーチを含め六人の公認コーチと人寄せパンダのキャンペーン（実は彼もコーチ資格が無いので日本でこっそり筆記試験を受験しました。講師のコーチの彼らですら、デイビットと一緒に食事で歓談するのは得意らしく、食事中、一緒に写真を盛んに撮っていました）の指導の講座でした。

（注1）日本トップリーグ一二チームのヘッドコーチ達も今年急遽I R B 認定コーチレベルⅢ講座（ニュージールランド）を受講しました。コーチングも資格も国際化して来ています。

①講義：ラグビー（スポーツ）は、Enjoy First（特に年少者は）、如何にラグビーを好きにさせ、興味を持たせることで、自己の力で向上させるか、に重点が置かれています。コーチは教師ではなくよき相談相手

②実技：基本スキルの Closed Skill と実践的練習の Open Skill で構成されています。

ここ数年ラグビーは、変わったといわれていますが、今回教わった Closed Skill、ほぼ半世紀前、湘南入学時入野さん等から教わった基礎は、何も変わっていませんでした。スクラムでの首の使い方、ボールハンドリング等本当に同じでした。東芝府中（ニュージールランドスタイル）の現役選手と話をしていると「井出川さんのは古い、今はそんなことはしない」と言われていたのでこれは驚きでした。

体の使い方、足（つま先）の向き、ひざ、足首の曲げ方、スタンスを非常に重視していますが、腕力を積極的に使うこと（鍛え方）は注目でした。

Open Skill（実践形式の練習）はさすがに工夫がしてあり、少ない人数でも実戦練習は出来る。

展開を継続しながらその場で必要なスキルを体得させようとするもので、継続して走る基礎体力は必須項目です。

（東芝府中は、九次の連続展開を想定して、二分間は全力で走り切れる体力を維持できるように繰り返し練習をしています）その展開の継続の中で基本スキルを身に付ける練習をします。

③筆記試験：実技スキルに関するものルール、勿論全て英語の設問です。

初日五時〜エンドレス（実際は一〇時まで）、二日目 一時〜五時

尚、認定は、筆記試験結果と、実技指導三〇回以上の指導報告書の審査で合否が決まります。（二〇〇四年一月頃）

（参考）パリ大会に向けワラビースメンバークラウド（参考）

一九九九年、南アでのラグビーワールドカップ（蛇足：当時ソニー・アフリカ社〈社長は蓮沼忠・三六回生〉はトップスポンサーの1社）でワラビースは完璧なパフォーマンスで優勝し、ラグビースタイルを変えたのですが、シドニー大会では、イングランドの飛び道具に敗れ、次回のパリ大会は、全員が八〇分走りきれぬ選手でのチームづくりを目指しています。具体的には、フロントでも 10km/80 min min 走れるチームを目指しています。

（日本のトップ選手は？ 古いデータで恐縮ですが、一九六六年私が大学生のときの調査記録（体育学会発表）では、フランカーが最高で 7km/70 min。現役諸君どのくらい走れますか？ 目指せ 10km！

私も、今年九月オーストラリア・ゴールドコーストの合宿を手はじめに、この測定の指導に参加し、チーム造りに関わっていく予定です。今後ラグビーは全力で走り廻れる選手によってスピードアップし、よりダイナミックなスポーツになっていくものと思っています。二〇〇七年のパリ大会で変化が起ころのを楽しみにしています。パリ大会に行きましょう。

以上

タイトル

四五回 小川 精一郎

今年(平成十六年)一月、私は二十数年ぶりに母校湘南の公式試合(新人戦)を観に行った。

三回戦で相手は花園連覇の実績を持つ相模台工である。試合前の両チームを見ると、湘南は平均体重で二十キロは軽く見える。部員多数の相手に対し、湘南は十六名の部員のうち、一名負傷しており、リザーブ無しである。私はその状況を見ただけで負けを覚悟した。しかし数分後私はそれを大いに恥じ入ることになった。湘南の小さな十五人は捨て身のタックルとテンポのよい速攻から前半二トライを奪い十二対〇とリードした。後半モールゴリ押しに徹した相模台工に七点差で涙を飲んだが、湘南はかつての私たちと同じように小柄ながら見る者の胸を打つラグビーを展開していた。

思えば三七年前湘南に入学した私をラグビー部へと駆り立てたのは中学時代テレビで見ていた「青春とはなんだ」という番組の影響が大きかった。湘南先輩で現東京都知事の石原慎太郎氏の原作になるこのドラマは、青年熱血教師が体をもてあましている不良生徒をラグビー部に誘い、弱小チームを強豪に育て上げるとい

う、その後一世を風靡した「スクールウォーズ」の原型のようなドラマで、番組の随所に登場するラグビーシーンに私は大いに胸をときめかせたものであった。

入部当初は、部室の汚さ、先輩の蛮カラ気質に戸惑ったが、そこに同化していくのにさして時間はかからなかった。

当時皮製だったボールは練習後泥を落とし丁寧に磨かなければならなかった。当時はボールにツバをつけて磨くのが「正しい」磨き方であった。(油をつけると、すべりやすくなるかららしい)磨けているとツバが出ない。そんな時には仲間にツバを「提供」してもらった。

我一年生が最初に出場した公式試合は八月二二日の国体予選一回戦だった。この試合キックオフの午後四時になっても相手の平塚農が現れず、レフリーが(不戦)勝ち名乗りを与えるべく我々を整列させたとき、平塚農の選手たちが息せき切って現れ、十五分遅れて試合が始まった。のどかな時代であった。この大会はベスト八に入り、慶応に五対二十で敗れた。

運動会の季節になるとグラウンドが使えなくなる。そんな時は海岸まで走って行き、砂浜で練習した。沈む夕日に向かって走っていると気分は青春ドラマであった。

体育の時間に、あえて泥だらけのジャージを着て行ったこともあるが、そんなときに限り、年に一回あるかないかのフォーケダンスで当時クラスに十人しかいなかった女子の前で小さくなっていたこともあった。

私は二年の終わりにひどい肉離れをしてしまった。復帰する際には徐々にペースアップすべきところ、いきなり全力疾走するものだから再発を繰り返すうちにすっかり悪化し私は復帰をあきらめていた。浦和高校との定期戦を間近に控え、主将の兼子君がぜひ浦高戦には一緒に出場しようと言ってくれた。浦高戦は全校あげてのビッグイベントだった。私は負傷を気遣ったり医師に相談したりすることなど全く考えず、出場すると答えていた。兼子君は足に爆弾を抱える私の為に浦高と交渉し、当時認められていなかった選手交替について相手の了解を得てくれた。幸い練習期間中は再発せず、試合当日を迎えた。私はありったけのサポーターを（五、六枚あったらどうか）太ももにはめ、お守りを間に挟んだ。決死の覚悟で臨んだその試合、まもなくハーフタイムというとき、私は自陣二五ヤード（現二二メートル）ライン付近でボールを受けた。目の前の相手をかわした瞬間目の前に空間が広がった。敵ラインの裏に出てノーマークになったのだ。その時、太ももに激痛が走った。あんなに恐れていた肉離れが再発したのだ。しかし火事場の馬鹿力は恐ろしい。私はそのまま七十メートル走りきってトライした。再発を察知して皆必死にフォロワーしてくれていたことが後でわかった。兼子君がゴールを決め、そこでハーフタイムとなり私は交代した。後半は殆ど茫然自失の状態で試合を見ていた。

私は卒業後、いろいろなチームでプレーした。

イラク駐在中は欧州が近いので五カ国（現六カ国）対抗を見に

英国まで行き、マレーシア駐在中は現地のクラブチームでプレーした。ベトナムへ長期出張した際は在住外国人のチームで練習した。現地の少年たちがものめずらしそうに楯円球に触っていた。新婚旅行で訪れたフィジーと一緒にプレーした少年達は裸足でプレースキックを蹴っていた。いろいろなところでいろいろなラグビーと出会った。

しかし、湘南高校ラグビー部時代は私のラグビー人生の原点であり、ツバをわけてもらったチームメイトや、海岸で練習した時の真っ赤な夕日を、時折懐かしく思い出す。

